

研究ノート

アナトリア新石器時代の調理用焼成遺構について

石田 温美

アナトリア新石器時代において発見される炉やオープンといった焼成遺構は、主な用途として調理が想定される。西アジア新石器時代研究の主眼は今日まで食料生産である。しかし、同じ食に関する研究でも加工・調理については研究が少ないように思われる。調理は単に人間活動の一つというだけでなく、共同体の集落構造を左右する行為である。本稿の目的は食料の加工・調理について、検出された調理用焼成遺構を基に分析を進め、新石器時代における社会構造の変化を明らかにすることである。まず、アナトリア新石器時代に見られる焼成遺構の分類を行った。その上で、チャタル・ホユックをはじめとした対象地域・時代の調理用焼成遺構を集成し、それ

らの種類、形態や立地などの年代の変遷を整理した。その結果、新石器時代を通して集落と焼成遺構の関係は中央アナトリアと南東アナトリアで差異があった。つまり、焼成遺構の立地が、中央アナトリアでは住居内、南東アナトリアでは住居外であるという傾向が見受けられた。オープンの出現や土器新石器時代中期にアナトリア内で広く見られた調理用焼成遺構の形態・種類の変化があった後も、この傾向は存続した。ここから、チャタル・ホユックやティグリス川上流域で土器新石器時代中期に見られた調理方法の変化は集落の構造を変化させるには至らなかったと推論することができた。

I. はじめに

これまでの西アジアの新石器時代に関する考古学的研究は、動物が家畜化されているか、植物が栽培化されているかを形態から同定することなど、食料生産の始まりが主な研究対象となってきた (Finlayson 2014, 丹野 2014, 本郷 2014, 三宅 2014)。しかし、農耕・牧畜や狩猟・採集などによる食料の獲得は、食の体系の中のほんの一部の面にすぎない。食料は人間によって獲得された後、加工、保存、調理、消費、廃棄という過程を経て利用される (Atalay et al. 2006)。こうした食の体系の各要素は相互に影響しあうものであり、ひいては生活、社会の構造を決定し、自然をも改変する (Wright 2000, 佐藤 2008)。これらの食の体系のうち、加工、調理に関する研究は、管見によれば少ないように思われる。これは、食料の獲得法の研究の影に隠れてしまい、調理に関する事柄はあまり注目されてこなかったからだと考えられる (Wright 2000)。本稿では食の体系において重要な位置を占める食料の加工・調理について、発掘調査によって検出された調理用焼成遺構を対象に分析を進め、その背後にある新石器時代における社会構造の変化を明らかにすることを目的としている。

II. 調理用焼成遺構の分類および先行研究

1. 焼成遺構の分類

本稿で使用する用語を統一するため、先行研究に言及する前に焼成遺構の分類と定義を示

す。西アジアの新石器時代の遺跡から検出される焼成遺構について、本稿では以下の4つに分類する(第1図)。

① オープン

燃烧空間を被覆する恒常的な上部構造を持つ調理用焼成遺構である。オープンの他、タノール(tannour)やパン焼き窯という用語で報告される場合がある。

② 炉

燃烧帯を区画する施設を持つ調理用焼成遺構である。燃烧帯を生活面から区画する施設としては、プラスターや粘土を貼った床、炉縁、掘り込みなどがあげられる。炉の下位分類として、生活面への掘り込みがあり、かつ燃烧帯が掘り込み内部に位置するものを「半地下式炉」とし、これにあてはまらないものを「地上式炉」と呼称する。

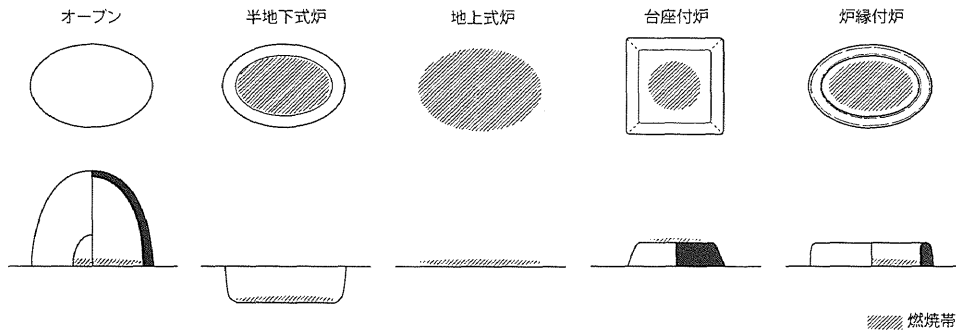
③ 火床炉

燃烧帯を区画する施設を持たない調理用焼成遺構である。恒常的な施設であるというよりは、一時的に使用されたものであった可能性が高い。

④ 集礫ピット

生活面への掘り込みがあり、かつ掘り込み内に被熱した礫が堆積する遺構である。礫の持つ保温性を利用して調理を行ったと考えられる。集礫ピットという名称と定義は、三宅裕の論考に準じている(三宅 1996)。本章第2節で述べるモリス(M. Molist)による集礫ピットの下位分類については、他の遺跡の報告書からは明確に確認することができなかつたため、本稿では採用しなかつた。

集礫ピットは基本的にファイア・ピット(fire pit)、クッキング・ピット(cooking pit)、ロースティング・ピット(roasting pit)、オープン・ピット(oven pit)という用語で報告されている。ただし、チャタル・ホユック(Çatalhöyük)の2647遺構、5003遺構のように、特に礫が充填されていないものであってもファイア・ピットの名称が用いられていることもある(Hodder 2014)。そこで本稿では、特に埋土の状況等には触れられておらず、単にファイア・ピット、もしくはロースティング・ピット、クッキング・ピット等と報告されているものは「半地下式炉」として分類した。



第1図 本稿における焼成遺構の分類

2. 調理用焼成遺構に関する先行研究

先史学・人類学における調理用焼成施設に関する研究は、1960～70年代のルロワ＝ゲラン (A. Leroi-Gourhan) による研究を嚆矢とする (Leroi-Gourhan 1973)。西アジア先史時代の調理用焼成遺構に関して1980年代にモリスが、2000年代後半からはアルブカーイ (D. Albukaai) が体系的な研究を行っている (Molist 1985・1989, Albukaai 2012a・2012b)。

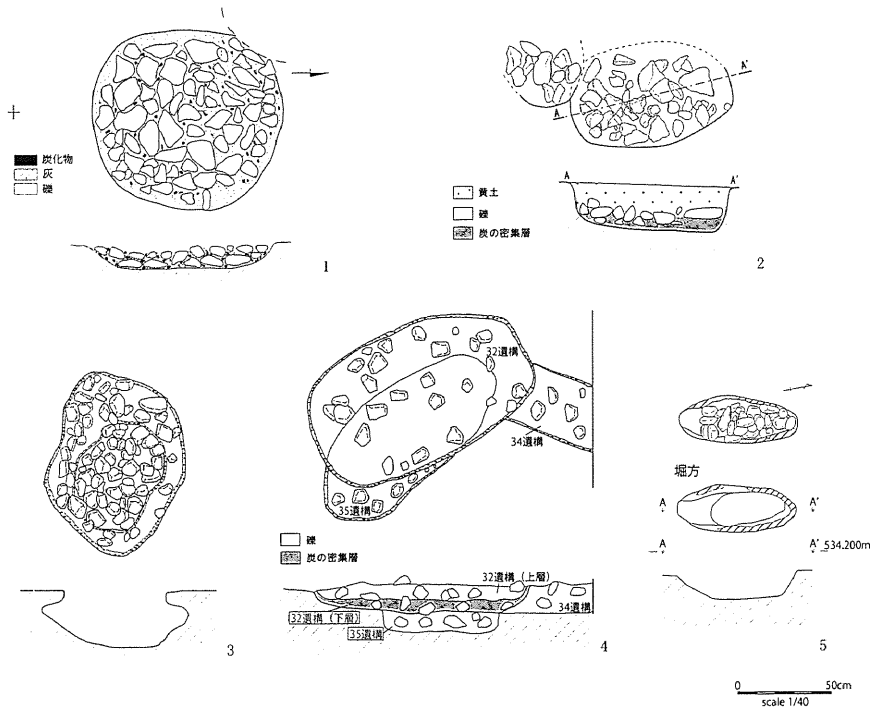
モリスは1980年代後半までに報告された西アジア新石器時代の焼成遺構の集成を行った (Molist 1989)。その中で本稿で集礫ピットとした遺構に二つの下位分類を設けている (Molist 1985・1989)。それは石焼き炉 (cuvette creusée) と石蒸し焼き炉 (fosses-foyers) である。石焼き炉は浅いピットの口まで礫が詰められ、被覆機能を果たす植物や粘土等の堆積が礫の上部に見られないものである (第2図1)。礫の上に直接食材を置いて、焼くことで調理をしたと想定されている。石蒸し焼き炉は、深いピットの底部に礫が堆積し、その上層 (時には下層) に燃料の炭化物や被覆機能を果たした堆積物が見られるものを指す (第2図2)。ピットの壁面が底部から地表面に近いところまで均等に被熱していることも多い。熱した礫からの余熱で食材を蒸し焼きにしたと想定されている。

集成の結果、西アジア新石器時代において石蒸し焼き炉は、ナトゥーフ期から先土器新石器時代にかけて見られることが指摘されている (Molist 1989)。また、オーブンは先土器新石器時代前半に初源的な例が現れ、先土器新石器時代後半に一般化することも指摘された。モリスは石蒸し焼き炉とオーブンを新石器文化を代表する調理用焼成遺構とみなしており、両者は相補的な関係にあると考えた。石蒸し焼き炉が隆盛した後、オーブンにとって代わられる現象は、先土器新石器時代前半から先土器新石器時代後半にかけての半地下式住居から地上式住居への変遷と一致すると結論付けた。なお、アナトリアにおける焼成遺構については、石蒸し焼き炉とオーブンは西アジアの他地域からアナトリアへ流入したものであると指摘している。また、オーブンの位置に関しても、ハジラル (Hacılar)、ジャフェル・ホユック (Cafér Höyük)、チャタル・ホユックなどアナトリアでは屋内に設置されているのに対し、西アジア他地域においては屋外であることが多いと指摘している。

アルブカーイは焼成遺構の明確な分類体系を構築し、現在のシリア南西部に位置するテル・アスワド (Tell Aswad) の焼成遺構について築造技術、形態、位置が変遷することを示した (Albukaai 2012a・2012b)。テル・アスワドは先土器新石器時代後半前葉から先土器新石器時代後半後葉にかけて居住された遺跡だが、恒常的な被覆施設を持たない焼成遺構である火床炉のみが検出された。分類の結果、炉の位置は集落のはずれから住居の中に、構築技術と形態は単純なものからより複雑なものへと変化することが明らかになった。

焼成遺構の位置が屋外から屋内に変化することについては、ライト (K. Wright) の研究においても同様の結果が提示されている (Wright 2000)。ライトはナトゥーフ期から先土器新石器時代後期にかけての西アジアにおいて、私的なスペースと共同スペースが流動的で組織化されていない状態から明確に区別される状態に変化する様子を、食に関わる遺物、遺構の分布を詳細に分析することで示した。

この他には、トカーチョバー (B. L. Tkáčová) が中央アナトリアのテペジク・チフトリク (Tepecik-Çiftlik) の焼成遺構を構築技術と位置の観点から分類し、他遺跡の焼成遺構との比較



第2図 アナトリア新石器時代の集磔ピット

- 1：ジャフェル・ホユック東区NR.7遺構 2：ジャフェル・ホユック33遺構と72遺構
 3：アカルチャイ・テペ20N区42遺構 4：アカルチャイ・テペ20P区32遺構, 34遺構, 35遺構
 5：サラット・ジャーミー・ヤヌ98号遺構

を行っている (Tkáčvá 2015)。また、中央アナトリアを中心に西アジアの調理用焼成遺構に関わる民族例を丹念に収集し、遺構に対する機能の類推も行っている。具体的には、テベジク・チフトリクにおいて検出されたオープンを、その形態の特徴から民族例に見られるフルン (firn) に結び付けている。フルンはドーム状の上部構造の天井部が平坦であり、地表面付近に開口部が設けられるもので、主に無発酵パンを焼くのに使われる。調理用焼成遺構の体系的な形態分類以外の注目すべき先行研究として、ムギ類を原料としたパンが新石器時代に食べられていたという仮定で、パン焼き窯らしきオープンの出土例をあげた藤井純夫やハーランド (R. Haaland)、焼成遺構を使った調理体系の一側面を示した三宅裕の研究があげられる (Haaland 2007, 藤井 1981, 三宅 1996)。

西アジア新石器時代の調理用焼成遺構については以上のような先行研究があげられるが、基本的には機能などについて深く考察されてきたとはいえない (赤司 2014)。焼成遺構に関する最も基礎的な研究であるモリスの研究についても、一遺跡から検出される様々な形態の焼成遺構がどのように関連するのか、例えば使い分けがあるのか、という点が明確でないという問題点があげられる。また多くが1980年代後半の研究であるため、その後には得られた新資料を集成した研究が必要だと考えられる。以下では先行研究の問題を踏まえて、各遺構の詳細な情報を得ることのできるチャタル・ホユックで検出された焼成遺構を形態分類を行った。

Ⅲ. チャタル・ホユックの焼成遺構

1. 遺跡の概要

チャタル・ホユックはトルコ共和国コンヤ県に位置し、同県最大の都市コンヤから南東52kmに位置する(Hodder 2011)。新石器時代に居住された東丘と銅石器時代に居住された西丘とがある。本論で分析対象とするのは1993年から2008年の調査において東丘の南区と4040区から検出された焼成遺構である¹⁾。以上の調査区ではホダー(I. Hodder)を中心としたイギリス・アメリカ合同調査隊が1993年から発掘調査を行っている。

チャタル・ホユックの住居は互いに壁を接するように密集して建てられ、各家屋は40から120年の寿命を終えると、それぞれ建て替えられたと考えられている(Hodder 2014)。主室の南側には焼成施設が位置し、そこでは食事や石器、ビーズ製作、骨脂製作等の作業が行われたとみられている。部屋の北側は南側より床面が高く作られ、床下埋葬や壁画が発見される。多くの場合副室が設けられ、そこからは盆状遺構や貯蔵施設が見つかる。住居へは、主室の主に南東にかかるはしごを使って屋根から出入りしたと思われ、これはそのまま焼成遺構の煙道ともなっていたと考えられる。

チャタル・ホユックの焼成遺構は大多数が炉とオープンに分類されている。その他、ファイア・スポット、ファイア・ピット等もある(Hodder 2014)。1999年までの調査から得られた資料を基に、セスフォード(C. Cessford)とニア(J. Near)はチャタル・ホユックの焼成遺構を大きく三つに分類している(Cessford and Near 2005)。その内訳は、①壁か柱に接して作られる楕円形ドーム型オープン、②住居内に位置するが壁に接しない、背の低い炉縁を持つ円形炉、③多くが住居外に散発的に発見され、特筆すべき構造物を持たないファイア・スポット、である。

2. 分析方法と結果

本稿で分析の対象としたのは、前述した2つの地区から発見された焼成遺構である。関連する発掘調査報告書に加え、チャタル・ホユックのオンラインデータベース²⁾からも情報を得ている。チャタル・ホユックにおいて焼成遺構はほとんどがオープンか炉に区分されているが、ファイア・ピットとして分類された焼成遺構もある。資料数は南区の住居内から105基、住居外が5基、北区および4040区の住居内から38基である(第1表)。ただし、南区の105基の資料には、2009年から2015年の調査で発見された15基も加えている³⁾。

本稿で、炉に関して設定した分類基準は以下の通りである(第1図)。



①壁の利用の有無、②生活面への掘り込みがあり、かつ燃焼帯が掘り込み内部に位置するか否か。これに当てはまる場合は半地下式炉であり、当てはまらない場合は地上式炉となる、③方形台座の有無、④炉縁の有無、⑤平面プラン。

遺構の形態分類を行なった結果、オープンには年代による明確な形態差は見られないものの、炉に関しては南区OからM層を境に形態差がみられることが明らかになった(第2表)。半地下式炉の深さには、ばらつきがあるが、平均すると0.13mほどである。南区ではM層あたりを境に、半地下式炉から地上式炉へと変化していることがわかる。北区では南区ほどはっきりと線を引けないが、G層より上層では半地下式の炉は珍しいものとして扱われている(Hodder 2014: p. 312)。

第1表 本稿で扱うチャタル・ホユックの焼成遺構一覧

南区 (屋内)					南区 (屋外)					4040区 (屋内)					
レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	
S	B.44	S111	灰	×	S	Sp.319	2647	ファ	●	J (sT-S)	B.47	1555	灰 or オ	●	
		123	灰	×											
		145	灰	×											
		1326	灰	●											
		1328	灰	×											
		1330	灰 or オ	×											
		1333	灰 or オ	×											
		1336	灰	×											
R	B.56	2060	灰	×	R	Sp.339	5003	ファ	●	I (sR-Q)	B.70	2752	灰	×	
		2061	灰	×											
		2075	灰	×											
	B.42	828	オ	?											
		1067	オ	×											
		1112	オ	●											
Q	B.65	1520	灰	×	Q	Sp.329	2640	灰	×	H (sQ-P)	B.60	2223	灰 or オ	●	
		2090	オ	●											
		2091	灰	×											
		2549	灰	×											
		2600	オ	×											
P	B.75	2614	オ	×	P	Sp.333	2639	オ	●	H (sQ-P)	B.58	2122	灰	×	
		2632	オ	●											
O (灰のみ)	B.80	7402	灰	×	O (灰のみ)	B.76	3427	灰	×	G (sO-M)	B.1	361	灰 or オ	?	
		3436	灰	×											
	3426	灰	×												
	3417	灰	×												
	3414	灰	●												
N (灰のみ)	B.97	3549	灰	×	N (灰のみ)	B.97	3532	灰	×	G (sO-M)	B.77	3090	灰	?	
		3531	灰	×											
		3530	灰	×											
		3528	灰	×											
		3525	灰	×											
M	B.100	3524	灰 or オ	×	M	B.100	839	オ	?	G (sO-M)	B.52 or B.51	1573	灰	×	
		3517	灰	×											
		B.24	443	灰 or オ											●
		Sp.109	82	オ											×
		B.50	96	灰 or オ											×
L	B.6	502	灰	×	L	B.43	1850	灰	×	F (sL-K)	B.5	242	オ	×	
		523	灰	×											
		416	灰	●											
		433	オ	×											
		437	オ	●											
	B.4	458	灰	●											
		1850	灰	×											
		1852	オ	×											
		1861	灰	×											
		1864	灰	×											
K	B.17	507	灰	×	K	B.2	411	灰	?	F (sL-K)	B.5	357	オ	×	
		545	灰	×											
		538	灰	×											
		541	灰	×											
		542	灰	×											
	B.2	548	オ	×											
		555	オ	×											
		571	オ	×											
		580	オ	×											
		579	オ	×											
J	B.23	268	オ	●	J	B.18	477	オ	●	F (sL-K)	B.5	242	オ	×	
		290	オ	●											
		293	灰	×											
		269	オ	×											
		411	灰	?											
	B.16	412	灰	×											
		430	オ	×											
		409	灰 or オ	●											
		431	オ	●											
		437	オ	×											
J	B.23	803	灰	●	J	B.18	472	オ	●	F (sL-K)	B.5	357	オ	×	
		524	灰	●											
		529	灰	●											
		533	灰	●											
		534	灰	●											
	B.18	552	灰	●											
		539	オ	●											
		808	灰	●											
		809	灰	●											
		806	灰	●											
J	B.23	557	オ	●	J	B.18	495	オ	●	F (sL-K)	B.5	242	オ	×	
		540	灰	●											
		539	灰	●											
		536	灰	●											
		807	灰	×											
	B.18	473	オ	●											
		477	オ	●											
		472	オ	●											
		495	オ	●											
		501	オ	●											

(凡例)

 オープン
 灰/ファイア・ピット
 オ : オープン
 ファ : ファイア・ピット
 ● : 掘り込みあり
 壁● : 壁を利用する目的の掘り込みあり
 × : 掘り込みなし

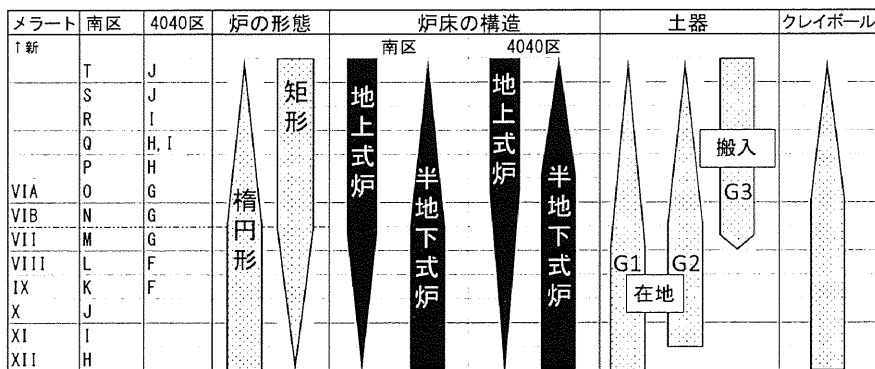
- 1) レベルは上層から下層にかけて表記。
例) 南区レベル S は R の上層。北区レベル F は G の下層。
- 2) B. は建物の略語
- 3) Sp. は Space の略語。帰属する建築物に明確なナンバリングがない場合表示
- 4) 4040 区レベル欄の () 内は対応する南区レベル
例) J (sT-S) → 北区レベル J は南区レベル T から S に併行

第2表 本稿で扱うチャタル・ホユックの炉一覧

南区 (屋内)								南区 (屋外)								4040区 (屋内)							
レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	炉床	平面形	備考	レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	炉床	平面形	備考	レベル	検出場所	遺構番号	分類	掘り込み	炉床	平面形	備考
S	B.44	123	炉	x	x	○	地上式炉	S	Sp.319	2647	ファ	●	x	○	(s-T-S)	B.47	1555	炉 or オ	●	?	○		
		145	炉	x	x	○																	
		1328	炉	x	x	○																	
		1330	炉 or オ	x	x	○																	
R	B.42	2061	炉	x	x	○	R	Sp.339	5003	ファ	●	x	○	(s-R-Q)	B.70	2752	炉 or オ	x	x	○			
		2075	炉	x	x	○																	
Q	B.65	1507	炉	x	x	○	Q																
		2549	炉	x	x	○																	
P	B.75	2091	炉	x	x	○	P	Sp.329	2640	炉	x	●	○	(s-Q-P)	B.60	2223	炉 or オ	●	●	○			
		2636	炉	●	○																		
O	B.80	3427	炉	●	○	不整																	
		3426	炉	●	○																		
		3417	炉	●	○																		
		3414	炉	●	○																		
N	B.97	3549	炉	x	x	○	半矩形+半楕形																
		3532	炉	x	x	○																	
		3531	炉	x	x	○																	
		3530	炉	x	x	○																	
M	B.24	443	炉 or オ	●	○	半矩形+半楕形	オープンか																
		96	炉 or オ	x	○																		
L	B.43	502	炉	x	x	○																	
		523	炉	●	○																		
		458	炉	●	○																		
		1850	炉	x	x	○																	
K	B.17	1864	炉	x	x	○																	
		599	炉 or オ	●	○																		
J	B.23	803	炉	●	○	洋ナシ形	不整																
		808	炉	●	○																		

(凡例)
 オ：オープン
 ファ：ファイア・ピット
 ●：あり
 x：なし
 ○：正円
 ○-：楕円形
 □：正方形
 □-：矩形

- レベルは上層から下層にかけて表記。
 例) 南区レベルSはRの上層。北区レベルFはGの下層。
- Bは建築物 (Building) の略語
- Sp.はSpaceの略語。帰属する建築物に明確なナンバリングがない場合表示。
- 4040区レベル欄の()内は対応する南区レベル
 例) J (s-T-S) → 北区レベルJは南区レベルTからSに併行。



- 調査区および調査主体者によって異なる建築層名が与えられている。
- 4040区に関してはメラートによる調査および南区との土器の様相による建築層の対応を示す。

第3図 チャタル・ホユックにおける調理に関連する遺構・遺物の転換期

チャタル・ホユック東丘の居住期間の後半、つまりメラート (J. Mellaart) の認定した VI 層以降になると、炉の形態に変化が見られるようになる (Hodder 2013) (第 3 図)。下層では不整円形が主体的であった炉の平面プランが、上層になると矩形および不整矩形に定型化する。この矩形炉は 2091 遺構のような正方形に近い矩形の炉縁を持つ、定型化された地上式炉に代表される。炉の平面プランについては矩形のものとそうでないものに用途の差は認めがたいとされているが、1328 遺構の台座上に土器が据え付けられていたことから、炉の平面プランの変化には、土器の使用が関係していた可能性が示唆されている。土器と焼成遺構に関しては、円形半地下式炉である 2636 遺構内から土器の破片が一定量出土しているが、原位置ではないようである。矩形炉に関しては、1328 遺構をはじめとした台座付矩形炉が、南区 S 層の建物 44 から 123 遺構、145 遺構、1328 遺構の 3 基が検出されている。北区では南区に先行して G 層の建物 49 内に矩形炉である 1665 遺構が現れる。また、前述した方形炉縁付地上式炉 (北区：2075 遺構、2091 遺構、南区：2122 遺構、2134 遺構、2614 遺構、2388 遺構、1573 遺構) が、半地下式炉が廃れるころに出現する。これらの多くは炉縁によって矩形に区画された中央部に燃烧帯が同心円状に広がっている (Hodder 2013)。

さらに前述した南区 O 層から M 層は、アタライ (S. Atalay) がチャタル・ホユックにおける調理法の転換期とした時期にあたる (Atalay 2005)。つまり、クレイボール⁴⁾と炉やオープンを組み合わせた調理から土器を使った調理への転換である。これは南区 O 層から M 層になるとクレイボールの出土数が減少し、主体的に出土する土器が在地のものから耐熱性のある搬入品へと変化することから推論されている。

半地下式炉とクレイボールの衰退は、蒸し焼きの調理法がより手軽に食物を湿式加熱できる土器を使った調理法にとってかわられたと捉えることができる (西堀 2013)。なお、磨石などの製粉具が焼成遺構内に廃棄されることがよくあると報告されている (Baysal and Wright 1995)。今回それにも留意して焼成遺構を分類してみたが、意味のある差異は見られなかった。

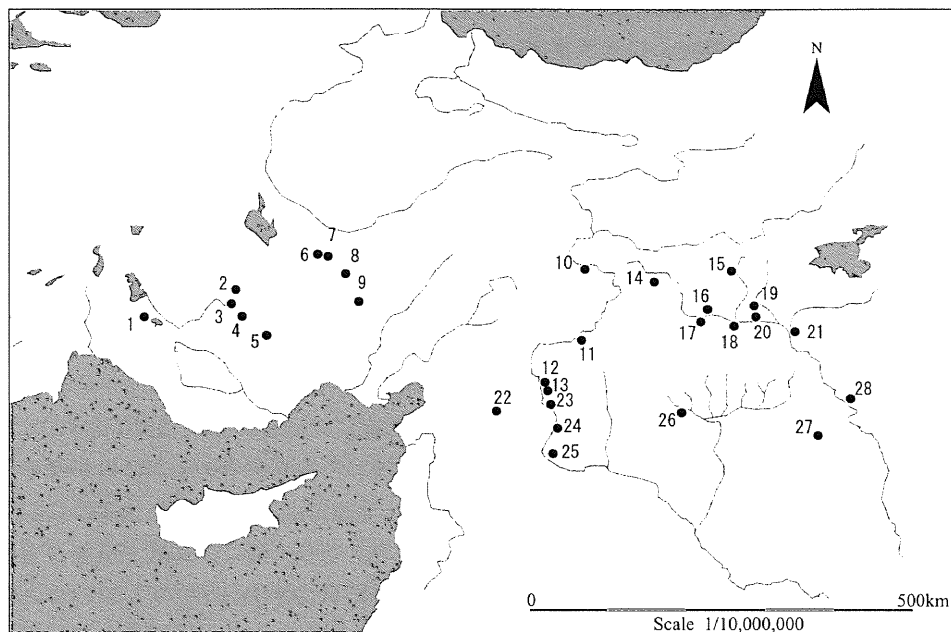
IV. 中央アナトリアと南東アナトリアにおける半地下式炉

本章では第 3 章第 2 節で分析したチャタル・ホユックの資料をふくむ中央アナトリアの焼成遺構と、南東アナトリアの焼成遺構とを比較する。焼成遺構は必ずしも単一の用途ではなく季節によってその用途を変える (赤司 2014) ことを考慮して、調理用以外の用途を持つ可能性のある焼成遺構も分析の対象とした。主な分析対象は中央アナトリアの 10 遺跡と南東アナトリアの 9 遺跡である (第 4・5 図)。

1. 中央アナトリアの焼成遺構

プナルバシュ (Pınarbaşı) (第 4 図 4)

オープンサイトと岩陰から構成される遺跡であり (Baird 2012, Tkáčová 2015)、オープンサイトに設けられた発掘区 A では先土器新石器時代後期の堆積が発見されている。ここでは曲線的なプランの半地下式住居が確認されているが、屋外には多量の礫と動物骨が集中して散布する区域があり、饗宴の痕跡とされる。付近から集礫ピットが 1 基検出されている。また、廃棄物の中には、底面が被熱し、上面が摩耗して光る玄武岩の平石がある。これも焼き板と



第4図 本稿で扱う遺跡

- 1: スベルデ 2: ボンジュックル 3: チャタル・ホユック 4: プナルバシュ 5: ジャンハサン
 6: ムスラール 7: アシユクル・ホユック 8: テペジク・チフトリク 9: キョシュク・ホユック
 10: ジャフェル・ホユック 11: ネヴェアル・チョリ 12: メズラー・テレイラト 13: アカルチャイ・テベ
 14: チャヨヌ 15: ハラン・チェミ 16: サラット・ジャーミー・ヤヌ 17: ハケミウセ
 18: キョルティック・テベ 19: スマキ・ホユック 20: ハッサンケイフ・ホユック 21: グシル・ホユック
 22: カラメル 23: テル・ハルーラ 24: ジェルフ・エル・アフマル 25: ムレイベト
 26: テル・セケル・アル・アヘイマル 27: ケルメズ・デレ 28: ネムリク 9

して調理に使われた可能性がある。

岩陰に位置する発掘区 B の土器新石器時代に相当する層からは、多数の集礫ピットが検出されている。この焼成遺構は大きな不整形の掘り込みを持ち、多量の礫と骨が充填されていた。その後、この集礫ピットを切って、洞窟の東壁を利用した半地下式の建築物が作られる。西側を石列からなる壁で区画したこの遺構は、内部に炉、外部にオープンを持つ。

アシユクル・ホユック (Aşıklı Höyük) (第4図7)

先土器新石器時代後期前葉とされる第4層においては屋内と屋外両方に焼成遺構が見られる (Özbaşaran 2011・2012, Özbaşaran and Duru 2015)。第4層においては住居は楕円形で半地下式である。後述する第2層やチャタル・ホユックのようにそれぞれの住居が密集することはない。これらの住居のうち、建物3からは、屋内の中心から円形炉が検出されている。この住居の床面には植物由来の有機遺物と日干レンガの破片が厚く堆積していた。また建物3より新しい住居である建物1からも似たような炉が検出されている。この炉は基部に川原石を敷き詰めて炉床とし、その外側を日干レンガによる炉縁が取り囲む。川原石の上には厚い灰と炭の層が堆積している。特筆すべきは8～9歳の子どもの人骨が、炉床を「枕」にして

発見されたことである。炉が単なる調理用の施設ではなく、象徴的な意味も持っていた可能性を示している。炉の西側からは盆状遺構、製粉具、骨製のヘラ、かごが原位置で出土している。建物3とその北方の建物6は、東側をオープン・エリアに取り囲まれ、ここでは食品の加工など幅広い作業が行われていたと考えられる。火床炉に伴って灰や小さな炭、被熱したエノキの種子がまとまって見つかっている。

先土器新石器時代後期中葉（第2層）の焼成遺構に関してはオズバシャラン（M. Özbaşaran）が詳細な研究を行っている（Özbaşaran 1998）。この時期の最も一般的な焼成遺構は、矩形住居内に位置する矩形の炉である。これらは調理や暖房、明かりの役割を果たしていたと考えられる。焼成遺構は全ての家に備えられているわけではなく、炉を持つ家は通常一つの部屋しか持たない（Düring 2006）。住居内の炉の多くは部屋の隅に位置し、部屋の中心にあるものは皆無である。住居床面から30cmほど掘り込み、側面には平石が垂直に立てられている。さらに住居床面に日干レンガで作られた炉縁が設けられている場合もある。この炉縁の住居床面からの高さは平均で20cmほどである。基部はメレンディス川の川原石やまれに石灰岩で敷石されており、その上から粘土を厚く塗布している。炉の一辺には炉縁がなく、その部分には灰が堆積していることから、そこが開口部だったと考えられる。炉の大きさは2.70 × 1.10 m から 0.80 × 0.60 m までとまちまちだが、基本的に部屋の大きさに比例している。炉の中には煙道を持つものもある。

住居全体の30%程度が炉を持ち、その60%以上には床下埋葬が認められる（Özbaşaran 1998, Düring 2006, Kvæstad 2010）。集落内の焼成遺構とそれを備えた住居の分布については、特に特徴的なパターンは見られない。これらのことよりオズバシャランは当該時期における焼成遺構の役割を、調理や暖房、明りをもたらす実用的側面と家の中心という象徴的側面の二つを持つとしている。

なお建物Tにおいて玄武岩のブロックを炉床とした大きなドームを持つオープンが見つかっている。第2層の焼成遺構として集礫ピットが見つかっており、川原石の下層から保存状態のよい炭化木材と炭化物が豊富に見つかっている。

ボンジュックル（Boncuklu）（第4図2）

全ての建築層は先土器新石器時代後期に属する（Baird et al. 2012）。M区の最も古い人為的堆積物は、住居のない区域に検出された生活廃棄物と考えられる動物骨、植物遺存体等である。おそらく廃棄物の一部はこの付近で検出された火床炉と石組炉で行われた調理によるものであろう。報告書の図版から判断すると、石組炉は平石を数枚据えた不整形のもので、平石の表面は黒く変色している（Baird et al. 2012 : p. 240, Fig. 4）。

K区では同じ場所に連続して建築される6つの建築物の内、建物9, 3, 1から焼成遺構が検出されている。全て住居内に区画が見られ、そのうち北側の西半分が調理区画とされている。建物9の炉は平滑な川原石で囲まれ、楕円形である。また炉床は南東に傾斜する。炉の西側には浅い煙道が取り付け、炉の周囲には柵の柱穴と排水用らしき遺構が見られる。建物3の炉は楕円形の半地下式炉で、建物9より大きい。掘り込み内の堆積は灰を多量に含む。建物1の存続期間後半にはプラスターを貼った炉縁を持つ炉が確認された。

H区では建物4から炉が検出されている。この炉の位置は住居内の南西であり、周囲に生活廃棄物が集積されている。この状況はチャタル・ホユックにおける焼成遺構の位置と類似する。

ムスラール (Musular) (第4図6)

アシュクル・ホユックの住民が狩猟に用いた特別な遺跡であると解釈されている (Özbaşaran et al. 2012)。建物Aに伴う形で、この遺跡で唯一の焼成遺構である正方形に近い平面プランの炉が見つかった (Tkáčová 2015)。炉壁は厚く0.36 mに達し、定型化していない日干レンガで構成される。廃棄時に充填されたと思われる大量の石灰岩と川原石が遺構内から検出されている。

ジャン・ハサン III (Can Hasan III) (第4図5)

チャタル・ホユックのオープン壁に接し、上部構造の一部を壁龕状構造が担うことが多いが、ジャン・ハサン IIIでも類例が一例報告されている (French 1972)。それは48K区の先土器新石器時代の層で見つかったものである。オープンは藁を混和した粘土で形成され、その内部から原位置で検出された植物遺存体を採取して分析が行われた。その結果、炭化した苞と藁が主体的に発見され、炭はほとんど見つからなかった。これは燃料として藁が使用されていたことを示唆すると解釈されている。

スベルデ (Suberde) (第4図1)

先土器新石器時代後期に年代づけられる第3層から、炉の跡とみられる灰と炭、固く焼けたローム土のレンズ状の堆積が発見された (Bordaz 1968)。この堆積には焼けた動物骨が大量に含まれていた。これらのレンズ状の堆積からは、種同定不能の木片と堅果類の外殻が発見されている。なお、この層に属す住居は8区で1基だけ確認されているが、炉との関係は不明である。

ジャン・ハサン I (Can Hasan I) (第4図5)

主に銅石器時代と土器新石器時代に居住された遺跡である (French 1998)。第5層では住居の東壁に隣接して半円形の炉が検出されている。それに後続して西壁に方形の炉が構築された。

テペジク・チフトリク (Tepecik-Çiftlik) (第4図8)

テペジク・チフトリクで最も古い焼成遺構は土器新石器時代前期に位置づけられる第5層から検出された、アシュクル・ホユックのものと類似する集磔ピットである (Tkáčová 2015)。後続する第4層では4基のオープンと炉が報告されている。このうち炉に分類されるSB17遺構とSB6遺構は屋内に位置し、残りのSB30遺構とSB34遺構の2基は屋外に位置する。このSB30遺構とSB34遺構は並んで検出され、どちらも底部に保熱用の石が敷かれることはなく、粘土のみで作られている。SB34は鍵穴形をしている⁹⁾。

土器新石器時代後期に年代づけられる第3層は上層と下層に細分される。第3層の下層はオープン付きの住居が検出されていることが大きな特徴である。このタイプの住居にみられ

るオーブンは、住居の外側に張り出した小部屋の中に位置している。トガーチョバーによって7基の焼成遺構が報告されているが、この時期の焼成遺構は他の時期と比べて比較的大きい。これらのオーブンは丁寧に維持されており、何度もプラスターを塗り直した痕跡が残っている。トガーチョバーは第3層下層のオーブンを民族例でいうフルンだと解釈している⁶⁾。

後続する第3層上層では4基のオーブンと炉が報告されている。大きさはSB2遺構5の0.76 × 0.65 mからSB5遺構の1.3 × 1.0 mまで幅がある。4基のうち3基が建物2に位置し、残りのSB5は先行する第3層下層のオーブンと同様に小部屋の中に位置する。またSB5遺構とSB13遺構は灰を取り除くためと思われる灰坑を持つ。

キョシュク・ホユック (Köşk Höyük) (第4図9)

第1層から第5層までの層位が調査されており、第1層が初期銅石器時代に、第2層から第5層が土器新石器時代に属する (Özbaşaran 2011, Öztan 2012)。第2層から第5層の住居は矩形であり、製粉具を備えた部屋を必ず持つ。2種類のオーブンと炉の3種類の焼成遺構が、住居内から検出されている⁷⁾ (Tkáčová 2015)。各住居に少なくともひとつの焼成遺構が存在し、よく認められるのは炉である。炉は矩形であり、常に炉縁の外側を住居内のベンチに隣接させている。第4層では小ぶりの礫で構築された円形炉が主流となり、壁に接した部屋の中央か隅に構築される。

2. 南東アナトリアの焼成遺構

チャヨヌ (Çayönü) (第4図14)

先土器新石器時代前期に位置付けられるラウンド・ビルディング・サブフェイズでは、半地下式円形住居の周りをオープン・エリアが取り囲む (Braidwood et al. 1971, Bıçakçı 1998, Elim-Özdoğan 2011)。このオープン・エリアからは、貯蔵穴や石器製作の痕跡とともに小さな火床炉が検出された。また、動物骨の破片を含む廃棄物が認められることからこのエリアは日常生活に使われたと考えることができる。

ハラン・チェミ (Hallan Çemi) (第4図15)

第3建築層までが報告され、先土器新石器時代前期前葉から先土器新石器時代前期後葉に位置づけられている (Rosenberg 2011)。これら全ての建築層で、屋内外に半地下式の炉が検出されている。炉は礫で構築された低い炉縁を持ち、円形である。これらの礫にはプラスターが塗られているにもかかわらず、熱の作用で割れている。また、集落の中央部分には直径15mほどの動物骨と熱の作用で割れた礫が大量に散布するエリアがある。その状況から、上述したボンジュックルと同じように饗宴が行われた場であったと考えられている。

ネヴァル・チョリ (Nevalı Çori) (第4図11)

モリスの分類を受けて、ネヴァル・チョリの発掘報告者は遺跡から検出されたロースティング・ピットを石焼き炉、ファイア・ピットを石蒸し焼き炉としている (Hauptmann 2011)。第1層から第5層が先土器新石器時代後期前葉から先土器新石器時代後期中葉に属する。第

1層ではオープン・エリアから47基の集礫ピットが検出されている。これらは川原石で掘り込みの開口部の内部が覆われ、川原石のいくつかは熱の作用によって割れている。第2層から第4層まで集礫ピットが検出されるが、その数は年代が新しくなるにつれ徐々に減少している。なお、第3層では居住とともに石器製作が行われるアトリエ、建物6からは集礫ピットが検出されている。報告者はネヴァル・チョリの日常生活のかなりの部分が家の外で行われており、それは屋外で発見される焼成遺構によって証明されるとした。

ジャフェル・ホユック (Cafer Höyük) (第4図10)

13の建築層が確認されており、全て先土器新石器時代後期に属する (Molist and Cauvin 1991, Cauvin et al. 2011)。第13層から第9層はジャフェル・ホユック前期と位置づけられている。第13層からは地山に掘り込む屋外の炉、第12層からは同一住居内に馬蹄形の炉と矩形のオープン、第11層からは屋外の集礫ピット、第9層では屋外から灰と木炭が詰まった半地下式の炉が検出されている。

第8層から第5層はジャフェル・ホユック中期に位置づけられる (Molist et al. 1991, Cauvin et al. 2011)。第7層からは屋外から半地下式の円形炉である84遺構が見ついている。第5層からは33遺構と72遺構という2基の集礫ピットが検出されている (Molist 1989) (第2図2)。この2基は形態が類似し、壁が垂直になるよう地面を掘り込んだものである。72遺構の堆積物は3層に分かれ、上層は被熱していない黄色土で放棄時の埋め戻しと考えられる。中層は礫の破片が密集しており、これらは被熱により赤褐色に変色している。おそらくこれらの石は3個体であったと思われ、使用後割られて廃棄されたと考えられる。下層は炭化した木片 (直径3~5cm) が密集する。またピット内部は開口部から底部まで均一に赤化している。

第4層から第1層のジャフェル・ホユック後期の焼成遺構についてはモリスが詳しく報告している (Molist 1985)。モリスは1985年までの発掘調査で発見された第5層から第1層の焼成遺構を7基紹介し、33遺構のみをファイア・ピット、他の6基を石焼き炉と分類した。ジャフェル・ホユックの石焼き炉は層位によって大きさと形態にばらつきがある。整った楕円形の小型のもの (西区 MH. 7 遺構: 0.55 × 0.40m) からいびつな形をした大型のもの (東区 NR. 7 遺構: 直径約 1m^φ: 第2図1) までであるが、深さは6~12cmとかなり浅い。またボウル状ピット (cuvette creusée) の名の通り、開口部が底部より広く、炉壁の断面はなだらかに曲線を描く。これらの集礫ピットはすべて屋外に位置する。

アカルチャイ・テペ (Akarçay Tepe) (第4図14)

先土器新石器時代後半から土器新石器時代にかけて居住され、東区と西区に発掘区が分かれている (Özbaşaran and Duru 2011)。東区 27V 区の第8層からは、屋外から2基の集礫ピットが検出されている。なお東区の第8層はフェイズ5、先土器新石器時代後期後葉に位置づけられる。同じくフェイズ5の26-27/T-U区の複数のオープン・スペースからは半地下式炉、灰坑、廃棄坑が見ついている。これらオープン・スペースのうちスペースAMでは半地下式の焼成遺構が見ついている。これらは楕円形の平面プランであり、掘り込みの側面をプラスターで補強しているが、度重なる被熱で脆くなっている。

西区で最も古い焼成遺構は先土器新石器時代後期最終段階のフェイズ4に位置づけられる(Balkan-Atli et al. 2000)。20P区第19層ではかなり柔らかい灰の堆積を持つオープン・エリアがあり、そこから数基の集礫ピットが見つっている。先行する第20層も同様の堆積と浅い半地下式炉が見られる。第19層の集礫ピット32遺構、34遺構、35遺構については、詳細な報告がされている(第2図3)。34遺構と35遺構は長円形の平面プランであり、32遺構によって切られている。3基とも掘り込み内部に礫が堆積する。32遺構は最下層に炭化物が集中する層があり、その上に礫を含む層が乗る。

先土器新石器時代から土器新石器時代への移行期であるフェイズ3の第9層でもトレンチ東端から集礫ピットが1基発見されている。直径1m程で、川原石が底部に敷かれている。動物骨と樹木由来の炭化物、そして白い灰が堆積している。同じくフェイズ3の20N区第7b層では屋外の作業場から調理用の集礫ピットが検出されている(第2図4)。これら4基には全て内部に焼けた石が1段ないし2段積まれている。灰はその上層に堆積する。これらの焼成遺構からは炭化物が出土しているが、動物骨は一切出土しなかった。

土器新石器時代前期のフェイズ2では、21O区から直径1.4mの楕円形のピットが検出された(Balkan-Atli et al. 2002)。厚くプラスターが塗られており長期間火にさらされたと思われる、4回プラスターの塗り替えが行われていた。この半地下式炉と考えられる遺構からは多量の石灰岩が出土している。

土器新石器時代中期から後期に位置づけられるフェイズ1の19K区第1層からは馬蹄形の炉が検出されている。西側に開口し、炉壁は日干レンガで作られている。特筆すべきは炉の北壁と南壁に2基ずつ柱穴らしきものが確認されていることである。

メズラー・テレイルト (Mezraa-Teleilat) (第4図12)

土器を伴わないフェイズ3Bの21E区と23G区では集礫ピットと考えられる遺構が見つっている(Karul et al. 2002, Özdoğan 2011)。21E区からは3基検出されており、側壁には厚くプラスターが塗られている。掘り込み内には被熱した川原石が充填されていた。また23H区では、底部に礫が敷かれる卵形のオープンと炉が検出されている。

続くフェイズ2では、土器新石器時代中期のフェイズ2Bから焼成遺構が検出されている。23H区では残存状態が良好な楕円形のオープンが1基検出された。この遺構は検出時には様々な大きさの礫の集積によって覆われていた。オープンの炉床は南に向かって傾斜し、何度も作り替えが行われたと考えられる。側壁の形態からドーム状の上部構造を持っていたことは明らかである。また、周囲を石列で囲まれていたという記述がある。一方、21H区では屋内の作業場建物AYから石器加工の形跡や一時的な火床炉等とともに、6体のイノシシの骨が出土している。またこの建築物の東方からは2基のオープンが検出されている。建物AYに近いオープンは礫を整然と並べた上に粘土を貼った床を持つ。発掘区北東端のオープンは傾斜を持った床で、礫で構成された壁に取り囲まれる。同時期の22G-H区では矩形の小部屋を複数持つ矩形住居の建物AG、ARにおいて家の壁の外側に接した矩形区画とオープンがそれぞれ検出された。作業用の小さなプラット・フォームも同じく見つっている。建物AGに付随するオープンの炉床は北に向かって傾斜し、ドーム状の上部構造を持っていたと考えら

れる。オーブンは楕円形の平面プランで、床は何度も作り替えられている。

スマキ・ホユック (Sumaki Höyük) (第4図19)

先土器新石器時代から土器新石器時代の移行期である第3フェイズでは複数の部屋を持つ、2階立てとされる矩形住居と、編み枝と漆喰を用いた建築物などとともに、大きな楕円形の炉とオーブンが検出されている (Erim-Özdoğan 2011)。これらの炉とオーブンの周囲からは、植物質の囲いのような痕跡が検出されている。季節性移動集団によって居住されたと考えられている土器新石器時代の第2フェイズでは、柱を用いた一時的な住居と薄い壁の住居、そして大きなオーブンもしくは炉と、集礫ピットが見つまっている。14H区、15H区、21M区では、周囲に灰が散布する楕円形の浅い集礫ピットが検出されている。炉やオーブンが多数見つかることから、この集落が冬にも居住されていたと解釈されている。土器新石器時代の半定住牧畜民による集落であると考えられている第1フェイズの炉やオーブンは比較的大きいが、第2、3フェイズと違い、囲いのような痕跡が見られない。これらの基部は常に石が敷かれており、その上にプラスターの貼られた固い粘土の層が炉床となっている。また、この床面は何度も作り直されている。

サラット・ジャーミー・ヤヌ (Salat Camii Yanı) (第4図16)

焼成遺構が検出されているのは土器新石器時代初頭に位置づけられる第1期と前期に位置づけられる第2期の層である (三宅他 2009)。集落においては独立して配置されるピゼ壁の建物を中心として、屋外に設けられた地上式の炉と集礫ピットが基本的な構成単位となっている。

地上式の炉は、2008年の調査までに約20基が確認されている。これらはピゼ壁の建物に比較的近い位置から検出される場合が多い。長軸の長さは約2mを測り、平面プランは楕円形である。構造は地面を浅く掘り窪め、拳大の石を敷き、縁辺部にやや大型の礫を並べる。礫の上に砂利混じりの粘土を貼って床面とし、さらにその周囲を粘土の壁で囲む。長軸上の一端に開口部が設けられ、かなり定型化が進んでいる。炉壁は高さが0.1m程残存する。炉の周囲には灰の堆積が顕著に認められる。第2期に帰属する22号遺構は、隣接するピゼ壁の建物が継続して使用されている間に7回作り替えが行われていた。報告者は、生活面のレベルが灰の堆積等で高くなるにつれて、炉の損傷の程度に関わらず、新たな炉を古い炉の上に重ねて構築したと解釈している (三宅他 2009)。

第1期、2期ともに集礫ピットが100基以上検出されている (第2図5)。その構造は地面を円形、あるいは楕円形に10cmから20cm程度掘りくぼめたものである。長軸の長さは0.3mから1mを超えるものまでばらつきがある。炉の内部は熱を受けて変色しており、被熱した拳大の礫、樹木に由来する炭化物、灰が充填される。そうした状況から、この遺構は石蒸焼き炉であると解釈されている (三宅他 2009)。これらの礫は地上式の炉に使われていた礫と同質であり、保熱性に優れた石を選択していたことが伺える。集礫ピットがまとまって検出される場合には、炉同士が切り合っていることも多くあり、それぞれの遺構の使用期間は短かったと考えられている。

ハケミ・ウセ (Hakemi Use) (第4図17)

後期新石器時代に年代づけられる5つの建築層が確認されている (Tekin 2011)。サラット・ジャーミー・ヤヌと同じく、基礎石を持たないピゼ壁の矩形住居が主体的である。2001年と2002年の調査では、第1層と第2層において屋内から1基、屋外から12基の炉が検出された (Tekin 2005)。これらの炉は円形から馬蹄形を呈し、その周囲にはムギ類や動物骨を含む灰の堆積が認められる。2011年の調査概報に掲載されている平面図からは、2003年から2005年の調査にかけて3層、5層でも屋外から炉が検出されていることが確認できる (Tekin 2011)。

3. 両地域における焼成遺構の変遷

先土器新石器時代前期に年代づけられる遺跡は、中央アナトリアでは発見されていない。同時期のティグリス川上流域においては、キョルティック・テペ (Körtik Tepe)、ハッサンケイフ・ホユック (Hasankeyf Höyük)、グシル・ホユック (Gusir Höyük)、ネムリク9 (Nemrik 9)、ケルメズ・デレ (Qermez Dere) など、焼成遺構自体の検出数が少ない遺跡群がある (Kolowski 1989, Watkins et al. 1989, Kozłowski et al. 1990, Watkins et al. 1990, Özkaya et al. 2002, Benz et al. 2010, Karul 2011, Özkaya et al. 2011, Miyake et al. 2012)。これらの遺跡では居住区外で加熱調理が行われていたと推測される。こうした状況は、焼成遺構が数多く見つかった同時期のユーフラテス川中・上流域のカラメル (Qaramel)、ムレイベト (Mureybet)、ジェルフ・エル・アフマル (Jerf el Ahmar) 遺跡とは対照的である (Ibáñez 2008a・2008b, Ryszard et al. 2012, Stordeur 2015)。

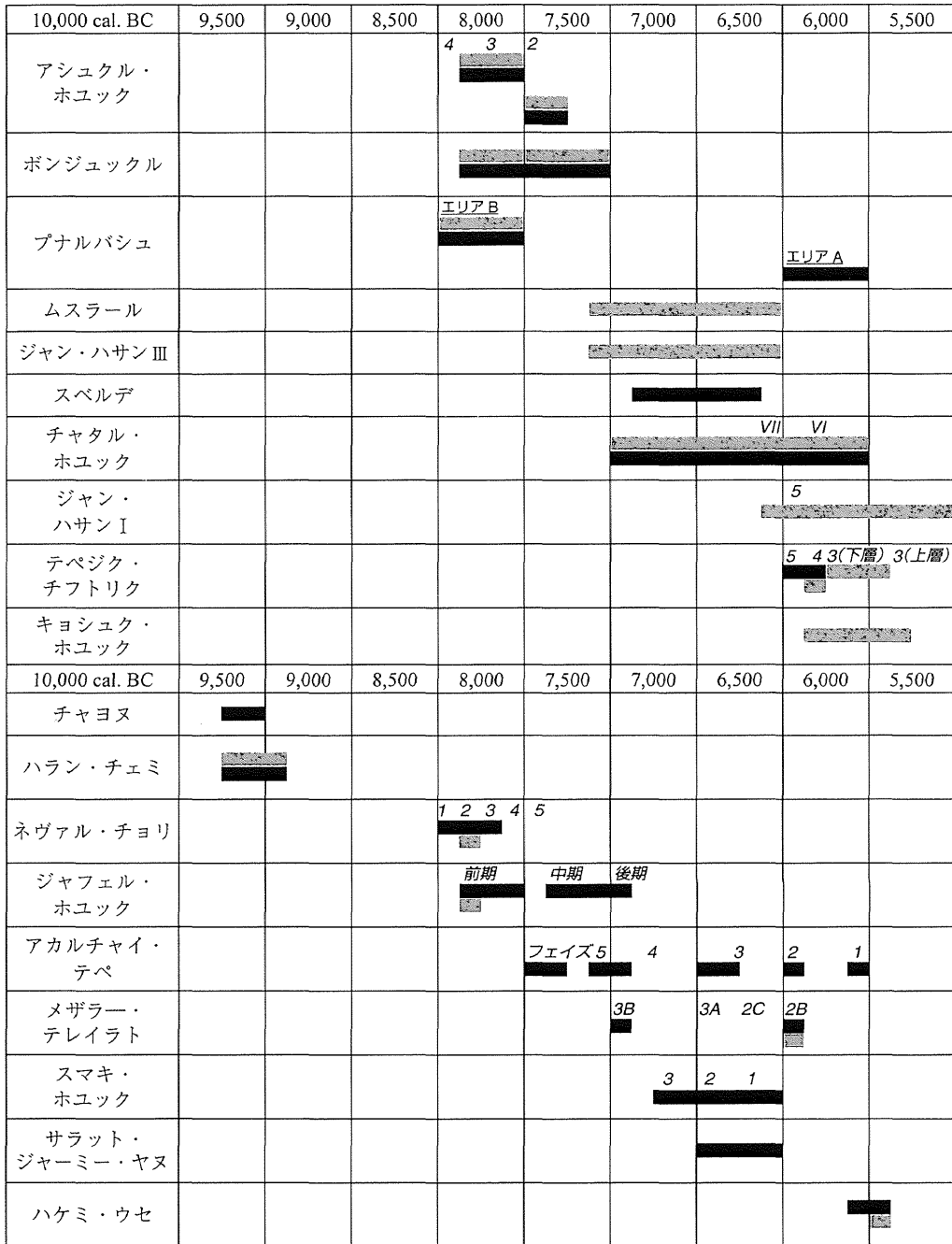
この時期の南東アナトリアでは、チャヨヌやハラン・チェミから炉および火床炉が検出される (Braidwood et al. 1971, Bıçakçı 1998, Elim-Özdoğan 2011, Rosenberg 2011)。集礫ピットはムレイベト、ジェルフ・エル・アフマルなどユーフラテス川中流域で見られるが、その他の地域では確認されていない。ムレイベトのオープン・スペースとジェルフ・エル・アフマルの矩形住居内からは最初期のオープンが1例ずつ検出されている。後者は建物EA10のキッチンから発見された調理施設群の一部を構成するものである (Stordeur 2015)。両者はほぼ同時期であるものの、設置される位置や形態に違いがある。

先土器新石器時代後期前葉になると、中央アナトリアでも集落が散見されるようになる。アシュクル・ホユック、ボンジュツクル、プナルバシュから検出される炉、火床炉は屋内外に点在する。集礫ピットも確認されているが、それらは屋外に位置する。同時期の南東アナトリアの遺跡群、例えばネヴァル・チョリやジャフェル・ホユックの住居は矩形地上式であり、焼成遺構はほとんどが屋外に位置する (Molist and Cauvin 1991, Cauvin 2011, Hauptmann 2011)。

先土器新石器時代後期前葉から中葉にかけてアシュクル・ホユック、東アナトリアのジャフェル・ホユック、ユーフラテス川中流域のテル・ハルラ (Tell Halula) でもオープンが検出されている (Molist 1989・1996・1998)。それらはすべて住居内に位置している。

先土器新石器時代後期中葉になると、ジャフェル・ホユックやアカルチャイ・テペなどのユーフラテス川流域で平面形態が楕円形の集礫ピットが現れる (Balkan-Atlı et al. 2000, Balkan-Atlı et al. 2002) (第2図3・4, 第6図)。この焼成遺構の出現については時期差がみられ、ティグリス川流域ではサラット・ジャーミー・ヤヌやスマキ・ホユックなど、土器新石

アナトリア新石器時代の調理用焼成遺構について



- : 屋内の焼成遺構が存在
 ■: 屋外（オープンエリア、住居付近）の焼成遺構が存在
 1) 斜線の文字は建築層・フェーズなどを表す
 2) 下線の文字は地区名など

第5図 中央アナトリアと南東アナトリアにおける焼成遺構の年代と位置

第3表 本稿で主に扱った焼成遺構一覧

遺跡番号	遺跡名	地区名・層位	検出場所	検出数	遺構名 遺構分類	特筆すべき 構造物	充填物 / 関連する 遺物	平面形	一辺1 (m)	一辺2 (m)	深さ (m)	備考	資料番号		
(中央アナトリア)															
1	スベルデ	第3層 複数の 発掘区	OA	多数	炉		動物骨, 堅果類の 外皮						1		
2	ボンジュックル	M区	OA	?	火床炉								2		
				1	炉	磔				0.5 ~1.0	0.5 ~1.0				
		K区	B.9	1	炉	磔			楕円形					煙道など付属 設備あり	
			B.3	1	半地下式炉				楕円形					プラスター裏 貼りの炉縁	
H区	B.4	1	炉												
3	チャタル・ホユック 第1表参照														
4	ブナルバシュ	A区	OA	B.5	1	火床炉							3		
				1	集磔ビット		被熱により割れた 磔	楕円形			「浅」	糞害にともな うか			
				1	炉	被熱した平石						糞害にともな うか			
				多数	集磔ビット	磔、骨	不整形								
B区	洞窟内	1	炉												
		1	オ	磔			馬蹄形								
5	ジャン・ハサン I	第5層	住居内	1	炉				0.5	0.5		4			
5	ジャン・ハサン III	48K区	住居内	1	オ		炭化した苞と糞, 栽培種のムギ、マ メ類					糞燃料の使用	5		
6	ムスラール	B.A	住居内	1	炉	日干レンガ	多量の石灰岩, 川原石	方形	1.6	1.7		日干レンガに よる炉縁	6		
7	アシュクル・ホユック	第4層	OA	B.3	1	炉	磔 日干レンガ		楕円形				日干レンガに よる炉縁	7,8,9	
				1	火床炉		被熱したハックベ リーの種子								
				第3層 or 第4層	B.1	1	炉	磔 日干レンガ		楕円形					日干レンガに よる炉縁
8	レベル2は Özbajaran 1998 を参照														
8	テベジク・チフトリク Tkáčová 2015 を参照														
9	キョシュク・ホユック	第2-第5層	住居内	各住居毎 各住居毎 各住居毎	オ オ 炉								11		
(南東アナトリア)															
10	ジャフェル・ホユック	前期 第13層	OA	1	半地下式炉								12,13, 14,15		
		前期 第12層	住居内	1	炉				馬蹄形						
		前期 第12層	住居内	1	オ				矩形	0.4	0.37			ビゼ様、ド ーム状	
		前期 第11層	OA	2	半地下式炉		被熱して割れた磔								
		前期 第9層	OA	1	半地下式炉										
		中期 第7層	OA	1	84 遺構 半地下式炉	磔			円形	0.84	0.73				
		中期 第5b層	OA	1	72 遺構 集磔ビット		被熱して割れた磔 など※	楕円形	0.95	0.62	0.4			※本文参照	
		中期 第5b層	OA	1	33 遺構 集磔ビット		被熱して割れた磔 など	楕円形						St.72 に類似	
		レベル4-1は Molist 1985 を参照 (下記2例のみ例示)													
		東区・後期 第3層	OA	1	NR.7 遺構 集磔ビット		北側: 被熱した磔 南側: 被熱しない 磔、動物骨	楕円形	ca.1	ca.1					
西区・後期 第2層	住居付近	1	MH.7 遺構 集磔ビット		被熱した磔	楕円形	0.55	0.4	"0.06 ~0.12"						
11	ネヴァル・チヨリ	第1層	OA	45	集磔ビット		被熱した磔					緑石	16		
				2	集磔ビット		被熱した磔								
				ca.12	集磔ビット		被熱した磔								
		第2層	OA	2	集磔ビット		被熱した磔								
				2	集磔ビット		被熱した磔								
		第3層	ハウス6 ※	2	炉									アトリエ アトリエ、 緑石	
				1	集磔ビット		被熱した磔								
第4層	OA	8	集磔ビット		被熱した磔										
		4	集磔ビット		被熱した磔										
4	OA	4	集磔ビット		被熱した磔										

アナトリア新石器時代の調理用焼成遺構について

遺跡番号	遺跡名	地区名・層位	検出場所	検出数	遺構名 遺構分類	特筆すべき 構造物	充填物 / 関連する 遺物	平面形	一辺1 (m)	一辺2 (m)	深さ (m)	備考	資料番号	
12	メズラー・テレイト	フェイズ3B 21E区	住居付近	3	集碟ビット		川原石	楕円形	0.60 ~0.70	0.3	0.8		17,18, 19,20	
		フェイズ3B 23G区	OA	??	集碟ビット			楕円形						
		フェイズ3B 23H区	住居付近?	1	オ	碟								
		フェイズ2B 23H区	OA	1	オ				楕円形					ドーム状
		フェイズ2B 21H区	B.AY ※	1	火床炉									屋内作業場、 イノシシの解体にともなうか
		フェイズ2B 21H区	屋内作業場 付近	1	オ	碟			楕円形					
		フェイズ2B 22G区	屋内作業場 付近	1	オ	碟			楕円形					
フェイズ2B 22H区	B.AG 付随	1	オ				楕円形	1.5	1		ドーム状、矩 形区画に付属			
フェイズ2B 22H区	B.AR 付随	1	オ				楕円形				ドーム状か、矩 形区画に付属			
13	アカルチャイ・テベ	東区 フェイズ5 27V区	屋外	2	集碟ビット								21,22,23, 24,25,26	
		東区 フェイズ5 27U区	スペース AM ※	1	半地下式炉			楕円形				住居付近の オープンス ペース		
		東区 フェイズ5 26-27T-V区	住居付近	?	半地下式炉									
				?	半地下式炉									
		西区 フェイズ4 20P区	OA	1	32遺構 集碟ビット		碟	楕円形	1.2	0.75				
				1	34遺構 集碟ビット		碟	楕円形						
				1	35遺構 集碟ビット		碟	楕円形						
		西区 フェイズ3 20O区	OA	1	半地下式炉	碟	動物骨、樹木由来 の炭化物、白色灰			1				
		西区 フェイズ3 20N区	OA	1	42遺構 集碟ビット		碟	不整形	0.75 ~0.8					動物骨の出土 一切なし、一 辺は長軸
		3	集碟ビット		碟	楕円形	0.6 ~0.8				動物骨の出土 一切なし			
西区 フェイズ2 21O区	OA	3	半地下式炉 か			石灰岩	楕円形	1.4		1				
西区 フェイズ1 19K区	OA	1	炉	ケルピッチ			馬蹄形	1.3	0.55		ケルピチによる 炉縁・柱穴			
14	チャヨヌ	ラウンド・ ビルディング・サブ フェーズ	住居付近	多数	火床炉							27,28		
15	ハランチュエミ	第1層-第 3層	屋内外	多数	半地下式炉	碟		円形	0.50 ~0.70			緑石	29,30,31, 32,33,34	
16	サラット・ ジャーミー・ヤヌ	1層~2層	住居付近	多数	地上式炉	碟		楕円形	ca.2				35	
			住居付近	多数	集碟ビット		被熱した碟、樹木 に由来する炭化物	円形、 楕円形	0.3 ~1.0	0.1 ~0.2				
17	ハケミ・ウセ	第1層	住居内	1	炉 or オ								36,37	
		第1層-第 2層	住居付近	12	炉 or オ		ムギ類、動物骨（ヒ ツジ、ヤギか）	円形、 馬蹄形 楕円形						
		第3層	住居付近	1?	炉 or オ									
		第5層	住居付近	1?	炉 or オ									
19	スマキ・ホユック	フェイズ3	屋外	?	オ							植物質の面白い モニュメント 的役割か	38	
				?	炉							植物質の面白い		
		フェイズ2	放棄された 住居 or 屋外	?	オ							植物質の面白い		
				?	炉							植物質の面白い		
		フェイズ2 14H区	OA	?	集碟ビット				楕円形			「浅」		
		フェイズ2 15H区	OA	?	集碟ビット				楕円形			「浅」		
		フェイズ2 21M区	OA	?	集碟ビット				楕円形			「浅」		
フェイズ1	屋外	?	オ	碟										
		?	炉	碟										

(凡例) OA:オープンエリア B:建物 オ:オープン ※:備考欄参照

1) 充填物 / 関連する遺物の欄について、特記事項がない灰、炭化物は省略。 2) 遺跡番号は第4図と対応する。遺跡中の焼成遺構は年代が判明しているものは、古いものから順に掲載。 3) オープンエリアは周囲に建築物が見られないエリアの意。一部この表ではopen spaceをオープンエリアと表記。 4) プラスターや粘土による裏貼りは省略。

器時代前半に現れる (Erim-Özdoğan 2011, 三宅他 2009) (第2図5, 第6図)。

先土器新石器時代後期中葉にはアシュクル・ホユックのように中央アナトリアに住居が密集し, その住居内の多くに焼成遺構を伴う集落構造が成立する。先土器新石器時代後期後葉のチャタル・ホユック, ジャン・ハサン III や後続するジャン・ハサン I でも同様の焼成遺構と住居の関係がみられる (French 1972, French 1998, Özbaşaran 2011)。アカルチャイ・テペやスマキ・ホユックなど同時期の南東アナトリアの遺跡では, 焼成遺構は屋外に位置している。先土器新石器時代後期中葉以降, 中央アナトリアでは焼成遺構は屋内に設けられ, 南東アナトリアでは屋外に設けられるという傾向が新石器時代を通して継続する (第4表)。

先土器新石器時代から土器新石器時代への移行期以降になると, オープンの位置について異なった様相が見られるようになる。屋外に焼成遺構が設けられることが一般的なメズラー・トレイラト, スマキ・ホユックでは, オープンも屋外に位置する (Karul et al. 2002, Özdoğan 2011)。ちなみに, 土器新石器時代後期のサビ・アビヤドでは, 中庭に複数のオープンが位置する例がある (Akkermans 1996a・1996b)。このほか, 屋外であるが, 住居の壁面に取り付けられたオープンはメズラー・トレイラト第2B層, チャタル・ホユック南区O層 (5000遺構) で見られる。いずれも土器新石器時代中期から後期のものであり, 比較的堅牢なつくりである。なお前述した楕円形集磔ピットは, ムレイバトなどで見られるような正円に近い平面形態をとる集磔ピットと同様に, 土器新石器時代後半には消滅してしまう (Molist 1989)。

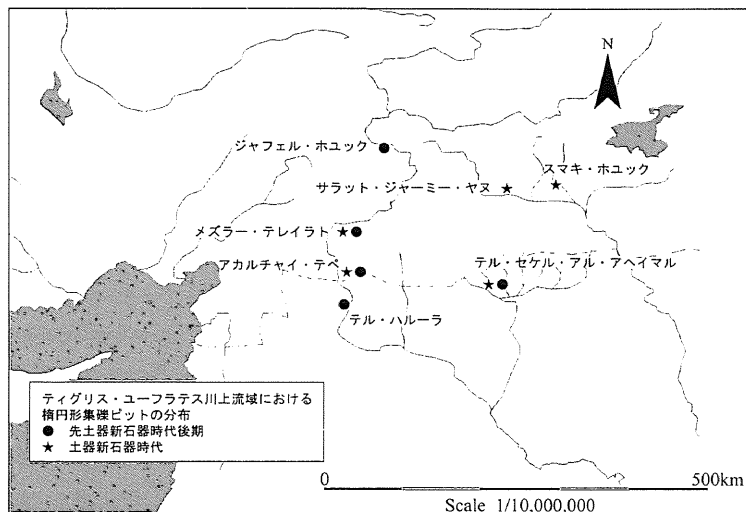
4. アナトリアの焼成遺構に関する考察

前節でアナトリアにおける焼成遺構を概観した。その結果, 焼成遺構の位置に関しては概して屋内であるのが中央アナトリア, 屋外であるのが南東アナトリアであることが示された。

三宅は楕円形集磔ピットが先土器新石器時代によく知られている遺構であり, 土器の無い時代に調理施設として重要な役割を果たしていたと考察している (三宅他 2009)。また, この遺構は土器新石器時代前半を下限とし, 後半になると類例がみられなくなると報告されている。これに関して, 土器新石器時代後期のハケミ・ウセで楕円形集磔ピットが見られないことが例として挙げられている。アナトリア以南ではテル・セケル・アル・アヘイマル (Tell Seker al-Aheimar) やテル・ハルラで同種の楕円形集磔ピットが検出されており, 同様に土器新石器時代中期に姿を消している (Molist 1998, Nishiaki and Le Mièrre 2005)。ただし, 前節で示したように楕円形集磔ピットの導入の時期には両地域内で差異がある。

チャタル・ホユックで確認できた, 土器新石器時代中期における半地下式炉から地上式炉へという変化は, ほかの遺跡では確認することができなかった。ただし, 集磔ピットから地上式の調理用焼成遺構へという変化は中央アナトリアではテベジク・チフトリク, 南東アナトリアではアカルチャイ・テペ, メズラー・トレイラトで見られた。

本稿でおこなった作業を通じて, 土器新石器時代中期には, 中央アナトリアおよび南東アナトリアで調理法の変化があった可能性を示すことができた。南東アナトリアでは集磔ピットを使った調理が土器を使った調理に, 中央アナトリアのチャタル・ホユックでは, クレイボールと半地下式炉とオープンを使った調理から, 地上式炉と土器とオープンを使った調理法に変化したと考えられる。中央アナトリアのテベジク・チフトリクで半地下式炉を使った



第6図 ティグリス・ユーフラテス川上流域における楕円形集磔ピットの分布

調理から地上式炉を使った調理に変化したと考えられる。

V. おわりに

本稿で行った分析を基に、アナトリア新石器時代における各地域、各時期の社会構造について考察し、展望を示す。先土器新石器時代前期に南東アナトリアで定住集落を営んだ共同体は、調理を居住区の外側で行う場合が多かったようである。ただし、家屋内から大量の製粉具を出土するキョルティック・テペなどのように、複数の家屋内で食品加工を行っている痕跡がある例もみられるなど、単純に共同で調理を行い、共同体内で食料を共有していたとは言えない面もある (Ibáñez 2008a・2008b, Ryszard et al. 2012, Stordeur 2015)。

先土器新石器時代後期になると中央アナトリアにも円形半地下式住居を伴う集落が現れる。その時点で、中央アナトリアではすでに屋内に焼成遺構が位置することが多く、そうした傾向は土器新石器時代まで続いていく。同時期の南東アナトリアよりも、中央アナトリアの共同体の方が、住居を使用する単位、つまり世帯への志向性が高かったと言えるかもしれない。先土器新石器時代後期にはアナトリア各地にも集磔ピットが現れる。ムレイベトやジャルフ・エル・アフマルなどでは屋内から検出された例があるが、基本的に集磔ピットは集落の住居間でよくみられる調理用焼成遺構である。集磔ピットが廃れた土器新石器時代中期から後期においてアナトリアとユーフラテス川中流域において屋外に堅牢なつくりのオープンが現れるのは、新しい共同の調理の形であるかもしれない。

本稿では新資料を集成することで、新石器時代を通して焼成遺構の位置が概して屋内にあるのが中央アナトリア、屋外にあるのが南東アナトリアであることを示した。また、チャタル・ホユックやサラット・ジャーミー・ヤヌの例で示したように、土器新石器時代中期に中央アナトリア・南東アナトリアという広い地域で調理法の変化があったことを明らかにした。

ただし、集落内における焼成遺構の立地には変化が見られない事例も多い。中央アナトリアのキョシュク・ホユックでは、焼成遺構は住居内に位置し、土器新石器時代前期から後期にかけて集落構造が変わることはない。南東アナトリアにおいても焼成遺構の位置は変わらず屋外である。これは土器の出現やそれによる調理法の変化が、少なくとも中央アナトリアと南東アナトリアにおいては、集落の構造を大きく変化させるには至らなかったためであると考えられる。今後は焼成遺構だけでなく、遺跡内における調理にかかわる遺物や遺構、動物遺存体などの被加工物の組み合わせを集成し、より具体的な調理と社会構造の関係を復元する必要がある。

謝辞

本稿は2012年度に同志社大学文学部文化史学科に提出した卒業論文の内容の一部を再構成したものである。当時の指導教員である中井義明先生には本卒業研究に関して様々なご教示、ご助言を頂いた。本稿を執筆するにあたり指導教員である三宅裕先生をはじめ多くの先生方、考古学研究室の先輩方に多くのご指導とご教示を頂いた。早稲田大学西アジア考古学勉強会では本研究について発表する機会を頂き、ご指摘を受けて新たな視点を得ることができた。また、図版、表の作成には筑波大学人文学類の学部生のみなさんにご協力いただいた。皆様に末筆ながら深く感謝を申し上げます。

註

- 1) 2007年の発掘報告書で北区 (North Area) と報告されていたものも含む (Hodder 2007)。
- 2) Çatalhöyük Research Project <http://www.catalhoyuk.com/index.html> (閲覧日 2016/10/1 付)。
- 3) 南区における地上式・半地下式炉の推移を確かめるために、炉に関しては2009年から2015年の調査で発見された15の資料もカウントしている。
- 4) クレイボール (clay ball) は①クレイボール、②ミニボール、③幾何学的形状のものに分類され、この中でも出土状況などから①クレイボールが調理に用いられたと考えられている。①は直径40から90mmをはかり、大多数が酸化炭素焼成で焼成される (Atalay 1995)。
- 5) トカーチョバーによるとバリフ川流域のサビ・アビヤド (Sabi Abyad) からSB34遺構と形態が類似する土器焼成窯が検出されている。ただしSB34遺構の周りから土器の焼き損じが見当たらないことからこの遺構は土器焼成窯でない判断されている (Tkáčová 2015)。
- 6) 第2章第2節を参照。なお同様の焼成遺構は新石器時代のものに限っても、チャタル・ホユックや西アナトリアのウルジャック・ホユック (Ulucak Höyük) で確認されている (Tkáčová 2015)。
- 7) トカーチョバーはキョシュク・ホユックの焼成遺構は炉の他にオープンとタノールがあるとしているが、本稿ではタノールは一つの分類として設けない (Tkáčová 2015)。
- 8) 東区NR. 7遺構の炉内部の南側には被熱した石と灰や木炭が発見される。一方、北側では被熱した石は見つからず、大量の焼けた動物骨が発見されている。これは石焼き炉の使用法を推定するのに特筆すべき発見である (Molist 1985)。

参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1996a *Tell Sabi Abyad, the Late Neolithic Settlement: Report on the Excavations of the University of Amsterdam (1988) and the National Museum of Antiquities Leiden (1991-1993) in Syria Vol. 1.* Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1996b *Tell Sabi Abyad, the Late Neolithic Settlement: Report on the Excavations of the University of Amsterdam (1988) and the National Museum of Antiquities Leiden (1991-1993) in Syria Vol. 2.* Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Albukaai, D. 2012a Les Foyers de Tell Aswad et Leurs Modes de Caisson Possibles. Essai de Reconstitution des Pratiques Domestiques et Sociales. In F. B. Tena, M. B. García, A. G. Baeh, C. T. Dacasa and O. V. Campos (eds.), *Broadening Horizons. 3rd Conference of Young Researchers Working in the Ancient Near East. Vol. 8.* Barcelona, Servei de Publicacions de la Universitat Autònoma de Barcelona, pp. 101-112.
- Albukaai, D. 2012b Architectural and Social Evolution of Structures of Combustion in Tell Aswad (PPNB-south of Syria), 8th International Congress on the Archaeology of the Near East, (Warsaw, 2012/4/30). (発表資料) .
- Atalay, S. 2005 Domesticating Clay: The Role of Clay Balls, Mini Balls and Geometric Objects in Daily Life at Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Changing Materialities at Çatalhöyük: Reports from the 1995-1999 Seasons.* Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, pp. 139-168.
- Atalay, S. and C. A. Hastorf 2006 Food, Meals, and Daily Activities: Food Habitus at Neolithic Çatalhöyük. *American Antiquity* 71-2, pp. 283-319.
- Başgelen, N., Ozdoğan, M., and P. I. Kuniholm (eds.), 2012 *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Western Turkey.* Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Baysal, A, and K. I. Wright 1995 Cooking, Crafts and Curation: the Ground Stone Artefacts from Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Changing materialities at Çatalhöyük: Reports from the 1995-1999 Seasons.* Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, pp. 307-324.
- Benz, M., Weninger, B., Alt, K. W. and V. Özkaya 2010 Stratigraphy and Radiocarbon Dates of the PPNA Site of Körtik Tepe, Diyarbakır. *Arkeometri Sonuclarz Toplantysz* 26, pp. 81-100.
- Bernbeck, R. and O. P. Nieuwenhuyse 2013 Established Paradigms, Current Disputes and Emerging Themes: The State of Research on the Late Neolithic in Upper Mesopotamia. In O. P. Nieuwenhuyse, R. Bernbeck, P. M. M. G. Akkermans, J. Rogasch (eds.), *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia.* Papers on Archaeology of the Leiden Museum of Antiquities 9, Turnhout, Brepols, pp. 17-37.
- Cessford, C. and J. Near 2005 Fire, Burning and Pyrotechnology at Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Çatalhöyük Perspectives: Reports from the 1995-99 Seasons.* Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, pp. 171-182.
- Düring B. S. 2006 *Constructing Communities, Clustered Neighbourhood Settlements of the Central Anatolian Neolithic ca. 8500-5500 Cal. BC.* Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten te Leiden. (博士論文).
- Finlayson, B. 2014 Introduction to the Levant during the Neolithic Period. In M. L. Steiner and A. E. Killebrew (eds.), *The Oxford Handbook of the Archaeology of the Levant (ca. 8000-332 BCE).* Oxford, Oxford University Press, pp. 123-146.
- Haaland, R. 2007 Porridge and Pot, Bread and Oven: Food Ways and Symbolism in Africa and the Near East from the

- Neolithic to the Present. *Cambridge Archaeological Journal* 17-2, pp. 165-182.
- Hodder, I. 2011 Çatalhöyük: A Prehistoric Settlement on the Konya Plain. In S. R. Steadman and G. McMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*. Oxford, Oxford University Press, pp. 934-949.
- Hodder, I. 2013 Becoming Entangled in Things. In I. Hodder (ed.), *Substantive Technologies from Çatalhöyük: Reports from the 2000–2008 Seasons*. Los Angeles, University of California at Los Angeles, pp. 1-25.
- Hodder, I. (ed.) 2007 *Excavating Çatalhöyük: South, North and KOPAL Area Reports from the 1995–1999 Seasons*. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research.
- Hodder, I. (ed.) 2014 *Çatalhöyük Excavations: the 2000–2008 Seasons*. Los Angeles, University of California at Los Angeles.
- Ibáñez, J. J. (ed.) 2008a *Le Site Néolithique de Tell Mureybet vol. 1*. BAR International Series 1843 (1), Oxford, Archaeopress.
- Ibáñez, J. J. (ed.) 2008b *Le Site Néolithique de Tell Mureybet vol. 2*. BAR International Series 1843 (2), Oxford, Archaeopress.
- Kozłowski, S. K. 1989 Nemrik 9, a PPN Neolithic site in northern Iraq. *Paléorient* 15-1, pp. 25-31.
- Kanjou, Y. and A. Tsuneki 2016 *A History of Syria in One Hundred Sites*. Oxford, Archaeopress Archaeology.
- Karul, N. 2011 Gusir Höyük. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 1-17.
- Kozłowski, S. K. and A. Kempisty 1990 Architecture of the Pre-Pottery Neolithic Settlement in Nemrik, Iraq. *World Archaeology* 21-3, pp. 348-362.
- Kvæstad, F. 2010 *House Symbolism and Ancestor Cult in the Central Anatolian Neolithic*. Unpublished Master Diploma Thesis, University of Bergen. (修士論文).
- Leroi-Gourhan, A. 1973 [1945] *Évolution et Techniques II: Milieu et Techniques*. Paris, Albin Michel.
- Miyake, Y., Maeda, O., Tanno, K., Hongo, H., and C. Y. Gündem 2012 New Excavations at Hasankeyf Höyük: A Tenth Millennium cal. BC Site on the Upper Tigris, Southeast Anatolia. *Neo-Lithics* 12-1, pp. 3-7.
- Molist M. (ed.) 1996 *Tell Halula (Siria) Un Yacimiento Neolítico del Valle Medio del Éufrates. Campanas de 1991-1992*. Madrid, Ministerio de Educación y Cultura.
- Molist, M. 1998 Espace Collectif et Espace Domestique Dans le Néolithique des IXème et VIIIème Millénaires B.P. au Nord de la Syrie: Apports du Site de Tell Halula (Vallée de l'Euphrate). In M. Fortin and O. Aurenche (ed.) *Espace naturel, espace habité en Syrie du Nord (10e-2e millénaires av. J.-C)*. Lyon, Travaux de la Maison de l'Orient 28-1, pp. 115-130.
- Nishiaki, Y. and M. Le Mière 2005 The Oldest Pottery Neolithic of Upper Mesopotamia: New Evidence from Tell Seker al-Aheimar, the Khabur, northeast Syria. *Paléorient* 31-2, pp. 55-68.
- Özbaşaran, M. 2011 The Neolithic on the Plateau. In S. R. Steadman and G. McMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*, Oxford, Oxford University Press, pp. 99-124.
- Özkaya, V. and A. Coşkun 2011 Körtik Tepe. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 89-127.
- Özkaya, V., San, O and H. Yıldızhan 2002 Excavations at Körtik Tepe. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.),

- Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs. Activities in 2000.* Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 739-758.
- Rosenberg, M. and A. Erim-Özdoğan 2011 The Neolithic in Southeastern Anatolia. In S. R. Steadman and G. McMahon (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*, Oxford, Oxford University Press, pp. 125-149.
- Ryszard, F., Mazurowski, R. Y. and Y. Kanjou (eds.) 2012 *Tell Qaramel 1999-2007: Protoneolithic and Early Pre-pottery Neolithic Settlement in Northern Syria. (Preliminary Results of Syrian-Polish Archaeological Excavations 1999-2007)*. PCMA N0.2, Warsaw, University of Warsaw.
- Steadman S. R. and G. McMahon (eds.) 2012 *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia*, Oxford, Oxford University Press, pp. 125-149.
- Steiner, M. L. and A. E. Killebrew (eds.) 2014 *The Oxford Handbook of the Archaeology of the Levant (ca. 8000–332 BCE)*. Oxford, Oxford University Press.
- Stordeur, D. 2015 *Le Village de Jerf el Ahmar (Syrie, 9500-8700 av. J.-C.) L'architecture, Miroir D'une Société Néolithique Complexe*. Paris, CNRS Editions.
- Tkáčová, B. L. 2015 *Hear the Cricket on the Hearth*. Master's Diploma Thesis, Masaryk University. (修士論文).
- Watkins, T., Baird, D. and A. Betts 1989 Qermez Dere and the Early Aceramic Neolithic of N. Iraq. *Paléorient* 15-1, pp. 19-24.
- Watkins, T. 1990 The Origins of House and Home? *World Archaeology* 21-3, pp. 336-347.
- Wright, K. 2000 The Social Origins of Cooking and Dining in Early Villages of Western Asia. *Proceedings of the Prehistoric Society* 66, pp. 89-121.
- 赤司千恵 2014 「西アジア各地の燃料—民族誌に見られる燃料の使い分け—」『アジアの土と炎：民俗誌と実験考古学の最前線：発表要旨集』シンポジウム「アジアの土と炎」実行委員会 16-19頁。
- 佐藤洋一郎 2008 「ユーラシア農耕史試論」佐藤洋一郎監・鞍田崇編『モンズーン農耕圏の人びとと植物』ユーラシア農耕史1 臨川書店 5-53頁。
- 丹野研一 2014 「農耕のはじまりを、出土植物から調査する」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 106-122頁。
- 西堀すき江編 2013 『マスター調理学』建帛社。
- 日本西アジア考古学会西アジア考古学講義ノート編集委員会編 2013 『西アジア考古学講義ノート』日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 1981 「レヴァント初期農耕文化の研究」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第1巻 岡山市立オリエント美術館 1-87頁。
- 本郷一美 2014 「西アジアの動物利用」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 124-138頁。
- 三宅 裕 1996 「西アジア新石器時代における調理体系の一側面について」西野元先生退官記念会編『考古学雑渉：西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会 297-308頁。
- 三宅 裕 2014 「西アジアの新石器時代 —農耕・牧畜と社会の関係」筑波大学西アジア文明研究センター編『西アジア文明学への招待』悠書館 90-104頁。

資料文献 (番号は第3表と対応)

- 1: Bordaz, J. 1968 The Suberde Excavations, Southwestern Turkey: an Interim Report. *Türk Arkeoloji Dergisi* 17-2, pp. 43-71.
- 2: Baird, D., Fairbairn, A., Martin, L. and C. Middleton 2012 The Boncuklu Project: The Origins of Sedentism, Cultivation and Herding in Central Anatolia. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 219-244.
- 3: Baird, D. 2012 Pınarbaşı; from Epipalaeolithic Campsite to Sedentary Village in Central Anatolia. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 181-218.
- 4: French, D. H. 1998 *Canhasan Sites I, Canhasan I: Stratigraphy and Structures*. Ankara, British Institute of Archaeology.
- 5: French, D. H., Hillman, G. C., Payne, S. and R. J. Payne 1972 Excavations at Can Hasan III 1969--1970. In E. S. Higgs (ed.), *Papers in Economic Prehistory*. Cambridge, Cambridge University Press, pp. 181-190.
- 6: Özbaşaran, M., Duru, G., Kayacan, N., Erdoğan, B. and H. Buitenhuis 2012 Musular: The 8th Millennium cal. BC Satellite Site of Aşıklı. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, 2012, pp. 159-180.
- 7: Özbaşaran, M. 1998 The Heart of a House: The Hearth. Aşıklıhöyük, a Pre-Pottery Neolithic Site in Central Anatolia. In G. Arsebuk, M. L. Mellink and W. Schirmer (eds.), *Light on Top of the Black Hill: Studies Presented to Halet Çambel*. Istanbul, Ege Yayınları, pp. 555-566.
- 8: Özbaşaran, M. 2012 Aşıklı. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 135-158.
- 9: Özbaşaran, M. and G. Duru 2015 The Early Sedentary Community of Cappadocia: Aşıklı Höyük. In D. Beyer, H. Olivier and A. Tibet (eds.), *La Cappadoce Méridionale de la préhistoire à la période byzantine*. (3èmes Rencontres d'Archéologie de l'IFÉA - Institut Français d'Études Anatoliennes Georges Dumézil, Istanbul 8-9 Novembre, 2012), Istanbul, CNRS.
- 10: Bıçakçı, E., Godon, M., and Y. G. Çakan 2012 Tepecik-Çiftlik. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 89-134.
- 11: Öztan, A. 2012 Köşk Höyük: A Neolithic Settlement in Niğde-Bor Plateau. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. Central Turkey*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, 2012, pp. 31-70.
- 12: Molist, M. 1985 Les Structures de Combustion de Cafer Höyük, Malatya, Turquie: Etude Préliminaire Apres Trois Campagnes. *Cahiers de l'Euphrate* 4, pp. 32-52.
- 13: Molist, M. 1989 Problématique des Structures de Combustion Fermées au Proche-Orient Néolithique Précéramique (10000-6000bc). In M. Olive and Y. Taborin *Nature et Fonction des Foyers Préhistoriques*. Actes du Coll de Nemours 1987, Mémoires du Musée de Préhistoire d'Ile de France, 2. Paris, Association Pour la Promotion de la Recherche Archéologique en Ile-de-France, pp. 303-312.

- 14: Molist, M. and J. Cauvin 1991 Les Niveaux Inférieurs de Cafer Höyük (Malatya, Turquie): Stratigraphie et Architectures (Fouilles 1984–1986). *Cahiers de l'Euphrate* 5-6, pp. 85-114.
- 15: Cauvin, J., Aurenche, O., Cauvin M. C. and N. Balkan-Atlı 2011 The Pre-Pottery Site of Cafer Höyük. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 1-40.
- 16: Hauptmann, H. 2011 The Urfa Region. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 85-138.
- 17: Karul, N., Ayhan, A. and M. Özdoğan 2001 Excavations at Mezraa-Teleilat. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs, Activities in 1999*. Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 133-174.
- 18: Karul, N., Ayhan, A. and M. Özdoğan 2002 Mezraa-Teleilat 2000. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.) *Salvage project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs. Activities in 2000*, Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 101-148.
- 19: Karul, N., Ayhan, A. and M. Özdoğan 2004 2001 Excavations at Mezraa-Teleilat. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs. Activities in 2001*. Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 57-106.
- 20: Özdoğan, M. 2011 Mezraa-Teleilat. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 203-260.
- 21: Arimura, M., Balkan-Atlı, N., Borrell, F., Cruells, W., Duru, G., Erim-Özdoğan, A., Ibáñez, J., Maeda, O., Miyake, Y., Molist, M. and M. Özbaşaran 2000 A New Neolithic Settlement in the Urfa Region: Akarçay Tepe, 1999. *Anatolia Antiqua* 8-1, pp. 227-255.
- 22: Arimura, M., Balkan-Atlı, N., Borrell, F., Cruells, W., Duru, G., Erim-Özdoğan, A., Ibáñez, J., Maeda, O., Miyake, Y., Molist, M. and M. Özbaşaran 2001 Akarçay Tepe Excavations, 1999. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs, Activities in 1999*. Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 309-357.
- 23: Balkan-Atlı, N., Borrell, F., Buxo, R., Duru, G., Ibáñez, J., Maeda, O., Molist, M., Özbaşaran, M., Piquet, R., Sana, M. and J. Watez 2002 Akarçay Tepe 2000. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs. Activities in 2000*. Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 287-318.
- 24: Balkan-Atlı, N., Duru, G., Ibáñez, J., Maeda, O., Miyake, Y., Molist, M. and M. Özbaşaran 2004 Akarçay Tepe - 2001 Season. In N. Tuna, J. Öztürk and J. Velibeyolu (eds.), *Salvage Project of the Archaeological Heritage of the Ilisu and Carchemish Dam Reservoirs. Activities in 2001*. Ankara, Middle East Technical University, TAÇDAM, pp. 227-250.
- 25: Özbaşaran, M. and G. Duru 2011 Akarçay Tepe, A PPNB and PN Settlement in Middle Euphrates – Urfa. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Euphrates Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 165-202.

- 26: Özbaşaran, M. and M. Molist 2006 Akarçay Tepe 2005. *Anatolia Antiqua* 14-1, pp. 245-249.
- 27: Braidwood, R. J., Cambel, H., Redman, C. L., and P. J. Watson 1971 Beginnings of Village-Farming Communities in Southeastern Turkey. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 68-6, pp. 1236-1240.
- 28: Erim-Özdoğan, A. 2011 Çayönü. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 185-269.
- 29: Rosenberg, M. 1993 Excavation at Hallan Çemi Tepesi, 1991. *Kazı Sonuçları Toplantısı XIV*, pp. 117-130.
- 30: Rosenberg, M. 1994 Excavations at Hallan Çemi Tepesi, 1992. *Kazı Sonuçları Toplantısı XV*, pp. 123-129.
- 31: Rosenberg, M. 1995 Excavations at Hallan Çemi Tepesi, 1993. *Kazı Sonuçları Toplantısı XVI*, pp. 79-94.
- 32: Rosenberg, M. 1996 The Hallan Çemi Excavation, 1994. *Kazı Sonuçları Toplantısı XVII*, pp. 9-19.
- 33: Rosenberg, M. 2011 Hallan Çemi. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 61-78.
- 34: Rosenberg, M., Nesbitt, R. M., Redding, R. and B. L. Peasnell 1998 Hallan Çemi, Pig Husbandry, and Post-Pleistocene Adaptations Along the Taurus-Zagros Arc (Turkey). *Paléorient* 24, pp. 25-41.
- 35: 三宅 裕他 2009 「サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡（トルコ共和国）発掘調査概報：2004-2008年」『筑波大学先史学・考古学研究』20 75-112頁。
- 36: Tekin, H. 2005 Hakemi Use: a New Discovery Regarding the Northern Distribution of Hassunan/Samarran Pottery in the Near East. *Antiquity*, pp. 79-303. (オンライン版).
- 37: Tekin, H. 2011 Hakemi Use. A Newly Discovered Late Neolithic Site in Southeastern Anatolia. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 151-172.
- 38: Erim-Özdoğan, A. 2011 Sumaki Höyük. A New Neolithic Settlement in the Upper Tigris Basin. In N. Başgelen, M. Özdoğan and P. I. Kuniholm (eds.), *The Neolithic in Turkey: New Excavations & New Research. The Tigris Basin*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları, pp. 19-60.

図出典

第1図 筆者作成。

第2図 1：Molist 1985 2：Molist 1989 3・4：Balkan-Atlı et al. 2000 5：三宅他 2009（いずれも再トレース・一部改変）。

第3図 筆者作成。

第4図 日本西アジア考古学講義ノート編集委員会編 2013 表紙裏下図（一部改変）。各遺跡の位置は第3表の資料番号で示した資料文献，各報告書および Kanjou and Tsuneki 2016 にもとづく。

第5図 筆者作成 各遺跡の年代は第3表の資料番号で示した資料文献にもとづく。その他，Başgelen et al. 2012, Steadman et al. 2012, Bernbeck et al. 2013, Steiner et al. 2014 および ex oriente が提供している The Platform for Neolithic Radiocarbon Dates http://www.exorient.org/associated_projects/ppnd_summary.php (閲覧日 2016/10/1), the Archaeological Settlements of Turkey Project <http://www.tayproject.org/enghome.html> (閲覧日 2016/10/1) を参考にした。

第6図 日本西アジア考古学講義ノート編集委員会編 2013 表紙裏下図（一部改変）。

Fire Installations at Anatolian Neolithic Sites

ISHIDA, Atsumi

It is assumed that fire installations at Anatolian Neolithic sites were mainly used for cooking. Less attention has been given to food processing and cooking than food production, which is the main focus of research in the Neolithic Western Asia.

Cooking is not only a human activity but also an activity that influences the structure of a community. The aim of this paper is to clarify the change in social structure in Neolithic Anatolia by analyzing food processing and cooking based on fire installations. First, the fire installations found in Central and Southeastern Anatolian Neolithic sites, particularly those from Çatalhöyük were classified. Secondly, analysis was undertaken of the diachronic change of the fire installations considering their typology and spatial patterns.

As a result, it was possible to determine the different tendencies in spatial patterning of these features between Central Anatolia and Southeastern Anatolia. In Central Anatolia, the fire installations tended to be located inside the house. In contrast, in Southeastern Anatolia they tended to be located outside the house. This tendency continued after the emergence of ovens, and changes in the type of fire installations, that occurred during the Middle Pottery Neolithic. Therefore, it is assumed that changes in the way of cooking in the Middle Pottery Neolithic, seen at Çatalhöyük and in the Tigris Basin, didn't affect the spatial patterning in Anatolian Neolithic settlements.